



Title	国立健康・栄養研究所 東アジアを代表する栄養に関する協力センターとして：アジアの栄養問題に関する技術支援と若手研究者の能力強化
Author(s)	西, 信雄
Citation	目で見えるWHO. 2020, 71, p. 16-17
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86552
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

国立健康・栄養研究所 東アジアを代表する栄養に関する協力センターとして ～アジアの栄養問題に関する技術支援と若手研究者の能力強化～



国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所
国立健康・栄養研究所 国際栄養情報センター長
西 信雄

大阪大学医学部卒業、同大学院博士課程修了。岩手医科大学、放射線影響研究所等をへて現職。現在、国立健康・栄養研究所国際栄養情報センター長。

国立健康・栄養研究所の概要

国立健康・栄養研究所は、2014年3月に「栄養と身体活動に関するWHO協力センター」に指定されました。2018年3月に更新され、2期目に入った比較的新しいWHO協力センターです。

国立健康・栄養研究所は現在国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所の一つに位置づけられますが、歴史は長く1920年に内務省所管の栄養研究所として創設されたのが始まりです。2020年はオリンピック・パラリンピック東京大会の後に我が国で「成長のための栄養サミット2020(仮称)」が開催予定ですが、当研究所も創立100年を迎えることから、栄養分野でのさらなる貢献が期待されています。

WHO協力センターとしての役割と活動

当研究所は、国民健康・栄養調査の集計、食事摂取基準の活用、生活習慣病の原因解明、国民の身体活動・運動習慣確立への貢献、エネルギーや主要栄養素の適切な摂取法の提示、「健康食品」に対



写真① 国立健康・栄養研究所 外観

する正しい情報の発信、栄養成分表示の信頼性確保など、「栄養・食事」、「身体活動・運動」、「食品の機能・安全性」の分野の健康に関する研究を行っています。当研究所では、国際栄養情報センターが中心となって栄養疫学・食育研究部、身体活動研究部、栄養・代謝研究部とともに「栄養・食事」及び「身体活動・運動」の分野での国際貢献を目指しています。

栄養分野のWHO協力センターは世界で20、西太平洋地域に6つありますが、食品中の化学物質に関する中国・香港のWHO協力センターを除くと、当研究所は栄養に関する東アジア唯一のWHO協力センターといっても過言ではありません。

我々の行動計画は次の2点です。

1. 世界的および地域的栄養目標に向けた母子栄養に関する包括的な行動計画の実施ならびに地域栄養および非感染性疾病に係る施策や行動計画におけるWHOとの連携による西太平洋地域各国への技術支援
2. 国立健康・栄養研究所のフェローシップ(アジア諸国における国際協力推進事業)において毎年最低1名をWHOが選定した候補者に割り当てることを通じた栄養サーベイランスおよび身体活動サーベイランスにおける人材の能力強化に関するWHOの取組の支援

行動計画1の非感染性疾病については、我が国では健康日本21(第二次)の目標のモニタリングに国民健康・栄養調査の結果が活用されており、同様のシステ

ムを西太平洋地域各国で整備するための技術支援に取り組んでいます。また、行動計画2にある栄養サーベイランスおよび身体活動サーベイランスは、厚生労働省が実施し、当研究所が集計を担当する国民健康・栄養調査における経験を生かせるものであり、人材の能力強化を支援しています。

当研究所が実施する国際協力の事業には、主に国際協力若手外国人研究者招へい事業の実施とアジア栄養ネットワークシンポジウムの開催の2つがあります。

国際協力若手外国人研究者招へい事業

行動計画2にも示したもので、毎年度1～2名の研究者を約3ヶ月間招へいして研修を実施しています。2005年度に開始し、これまで12カ国から25名の研究者を招へいしました(表参照)。毎年11月頃に当研究所のHPで公募するとともに、WHO西太平洋事務局の担当官から各国のWHO事務所を通じて候補者を推薦いただいています。定型のプログラムではなく、招へい研究者の経験や希望をもとに当研究所が研究課題を設定して、栄養サーベイランスおよび身体活動サーベイランスに関連する研修を行っています。近年の招へい研究者の所属と研究テーマを以下に紹介します。

2017年度

マレーシア・サンマレーシア大学「栄養素摂取量の評価におけるスコア化法の比



写真② 第8回アジア栄養ネットワークシンポジウム出席者

表 国際協力若手外国人研究者招へい事業における招へい研究者の国別人数

国	人数
マレーシア	7
ベトナム	4
中国	3
タイ	2
モンゴル	2
インド	1
インドネシア	1
韓国	1
トルコ	1
ネパール	1
バングラデシュ	1
フィリピン	1

較」

ベトナム・ホーチミン医科薬科大学「ベトナム版フードピラミッドスコアの開発およびベトナム版フードピラミッド遵守と肥満の関連」

2018 年度

フィリピン・食品栄養研究所「非感染性疾患予防のための国民栄養調査の有用性」

2019 年度

タイ・マヒドン大学「タイと日本における小児肥満の予防・管理のための食環境」

招へい研究者には行政機関に勤める方もおられ、必ずしも研究者に限りませんが、研修中は日頃の業務や研究を離れて研修に集中できる環境を提供するよう努めています。

アジア栄養ネットワークシンポジウム

アジア栄養ネットワークは緩やかな集合体であり、当研究所がアジア地域における健康および栄養上の問題解決に積極的に貢献することを目指して、2003 年度以来、隔年で開催しています。シンポジウムでは、国内外より招へいた当該分野の専門家とともに学術的な討議と意見交換を行っています。WHO 西太平洋地域事務局の栄養の担当官と連携を取りながら継続して開催してきたことも、WHO 協力センターに指定された要因の

一つと考えています。予定も含めて直近 3 回のシンポジウムのテーマを以下に紹介します。

2016 年 3 月 23 日開催

第 7 回「学童の肥満予防のための施策」

2018 年 2 月 21 日開催

第 8 回「西太平洋地域における SDGs 達成に向けた母子栄養施策の重要性」

2020 年 2 月 18 日開催（予定）

第 9 回「国民栄養調査を用いた健康格差の評価とモニタリング」

第 9 回のシンポジウムでは健康格差の評価とモニタリング方法について、アジア各国からの報告をもとに相互の理解を深め、関連する課題や今後の展望を議論する予定です。なお、第 7 回のシンポジウムは、WHO 西太平洋事務局との共催による「西太平洋地域における小児肥満サーベイランスに関する諮問会議」（2016 年 3 月）と連動して開催しました。

国内の WHO 協力センターとの連携

最後に、WHO から強く求められている他の WHO 協力センターとの連携の状況を紹介します。

WHO Collaborating Centre for Integrated People-Centred Service Delivery に指定されている国立保健医療科学院（本誌 2019 年夏号参照）が

WHO 西太平洋事務局と共催する Regional Workshop on Strengthening Leadership and Advocacy for the Prevention and Control of Non-communicable Diseases (LeAd-NCD) には、オブザーバー等で度々出席し、西太平洋地域各国の政策担当者等と意見交換を行っています。

また、WHO 健康都市・都市政策研究協力センターに指定されている東京医科歯科大学は健康都市連合学会の事務局の役割も果たしており、2018 年 10 月にマレーシア・クチンで開催された第 8 回健康都市連合学会で私がゲストスピーカーとして「ヘルスプロモーションの測定におけるリスクファクターのサーベイランス」について講演する機会をいただきました。

なお、健康危機管理 WHO 協力センターに指定されている兵庫県立大学（本誌 2019 年夏号参照）とは、具体的な連携は始まっておりませんが、昨年度当研究所に国際災害栄養研究室が発足したのを機に、災害栄養分野での連携を模索しているところです。

栄養に関する WHO 協力センターは、国内でももちろん唯一です。「栄養と身体活動に関する WHO 協力センター」として、今後も他の機関との連携を進めていきたいと思っています。